

# 南方（ビルマ）

ビルマ「龍」

救援補充隊として

福岡県 松尾 喜次郎

教育召集入隊

私は零細農家の長男に生まれ、学校卒業後近くの三池炭鉱の機械製作所に就職して働いていた。徴兵検査は視力不十分で補充兵に回されたが、昭和十九（一九四四）年三月教育召集令状を受けた。結婚後二カ月経った時であった。同じ町内から三人が歩兵第四十八連隊（久留米）に入隊。所属は第四中隊第四班に定まった。軍服は上下色の異なったようなお粗末な服

で、靴も寸法が合わないものが支給され、その旨申し出たが「足を靴に合わせろ」と申し渡された。

入隊後一週間経過した日、私は物干し場監視の任に当たって、来合わせた同年兵と談笑していたのを古兵に見られて、同年兵の一人がいきなりビンタを食ってブッ倒れたので吃驚した。軍隊はすべてが全体責任である。私達も歯を食いしばり足を開いて姿勢を取ると同時にポカリと殴られた。倒れはしなかったが目から火が出るとは本当のことである。

教育中誰かがごく小さな銃の部品をなくした。初年兵一同十数人が横一列に並び、四つん這いとなり、自分の視野四〇センチ幅を凝視して前進して遂にこの小さい部品を発見することが出来た。教育二カ月目に入って、私が入隊以前に機械工であったためか兵器修

理の教育を受けることとなった。中隊からは私達二人が選ばれた。朝食が終わると食器洗いもせず班内から出て昼食に班内に戻ってまた教育に向いた。

修理と言っても困難な修理でなく、時には編上靴などの修理もあった。二班に行った時「松尾二等兵入ります」の声が小さいと古兵に叱られ自転車乗りを命ぜられた。自転車乗りはテーブル間に両手で足を浮かせペダルを踏む要領をせねばならない。右上官と言われれば右手を上げて拳手の敬礼をせねばならぬ。当然足が床に着く、そうすると古兵から叱られる。元の姿勢に戻ってペダルを踏み続けなければならぬ。十分間も続けると参ってしまう辛い制裁であった。

ある雨の日、私は兵器修理のため班を出て行った。他の初年兵は雨のため班内に残って兵器の手入れをやっていた。私の小銃も誰かが手入れしてくれたのである。消灯後古兵が私の銃口蓋がついていないのに気づき起床を命ぜられた。前に述べたように全体責任であり、初年兵全員上靴でビンタを取られた。上靴のビンタは痛さがひどい。銃口蓋は古兵が拾っていた。私

は皆に対し気の毒でならなかった。

ある日消灯後、古兵が銃の引き金を調べていたところ、カチッと引き金が鳴って、初年兵一同起床「腕立て伏せ」を長時間にわたり実施され涙を流したこともある。

私の班では結婚していた初年兵が私ともう一人いた。この初年兵の奥さんが六歳年上であったので古兵から結婚生活についてよく試問が繰り返された。

たたかれることでは木銃の銃尾の太い方で尻を強打される時の痛み、また銃の薬室掃除棒の大きい方で頭をたたかれることもあった。いずれも全体責任のためであり、時には何のためたたかれているのか不明のまままたたかれた時もあった。

六月に入ってから連隊全部が二つのコースに分かれて民宿の演習が実施された。私の中隊は福島町を通り山鹿市付近で別コース隊との攻防戦を行い、その後、八女郡の桐葉を通り、船小屋の上流の集落に宿営した。民家の人達からは戦時下のこと故大変な歓待を受

けた。ご馳走を十分いただいた。隊では竹で作った食器に大豆混じりの飯であったのが白飯を十分腹いっぱい頂いたので、高良台を通り兵営に午後到着後、広場に全隊が集合し訓練が始まっている時、腹具合が悪くなり、脂汗を流し苦しんでいるのを上等兵殿に気付いてもらって、便所へつれて行ってもらい、猛烈な下痢をしてから大分楽になった。民家での食いすぎが原因であった。この時は叱られずに済んだ。除隊後知ったが、この演習時家の近くを通過した隊が休憩したので、私の父と妻が私を尋ねて歩いたらしいが、私は別のコースを歩いていたのであった。

六月からは夏の服と交換であり、冬物の袴下を返納するため洗濯して、監視つきの物干しに干しておいたがいつの間にか盗まれていた。さあ大変、服の交換日まで幾日もない、報告すればビンタぐらいでは済まない。兵器修理の帰り道、他の中隊の物干し場で監視兵にでも見付かった場合どうなっていたらと思うと縮む思いであった。

親父と妻が面会に来て営門の衛兵に面会を届けたと

ころ、私は外出中で不在との回答にて二人は諦めて営外に出てしまった。誰かが私に面会者のあることを知らせてくれたので飛んで面会所へ行って捜したが見付からない。芝垣の外を見ていたら外にいるのを発見した。二度と営門内に入ることは許されない、友人に見張ってもらって人目のない所を選んで芝垣越しに一分ほど話し合い、垣越しに食物を受け取り、友人で知人の上等兵殿の所で食べさせてもらった。ばた餅の味は忘れられない。

六月下旬除隊命令が出た、飛び上がって喜んで帰宅した。除隊は一部であり大部分は残留があり、そのまま出征した者もいたそうである。

再召集ビルマ戦線へ

一ヵ月間はアツという間に過ぎ、昭和十九年七月中頃再び召集令状が届いた。妻から妊娠を告げられ男児が生まれても女兒であろうと真美と名づけようと約束する。今回の入隊は長崎県の大村歩兵第四七連隊となっている。村内から三人であった。親近者達も大村まで送って別れを惜しんでくれた。「行って来る」と

言い残して営門に入る。この隊には義兄が先に入隊していたので訪問したりして心強かった。

入隊した翌日、銃、毛布、天幕、それに冬服が支給されたので征途は北の方かと思った。午後の汽車に乗り夕方門司港駅に下車、宿舎は見番を改造したものであるとか。

一泊して慌ただしく乗船。船は五千トン級の貨物船であり、軍属の人もかなり乗船していた。船倉の中段に仕切られて、一段の高さがメートル五〇センチもなく、中屈みで行動せねばならないぐらい。真夏の候とて暑さに大弱りである。夜は甲板に出て涼を取る。出航前に魚雷攻撃を受けた時の汽笛の回数等の訓練を受けた。舷側にメートル角の箱が数個取り付けられている。これは大使用とのこと、下の海面がまる見えであり、波がない時はよいが、波の高い時は苦勞する。

一泊ほどして出航した。いつの間にか十数隻の船団となっていた。駆逐艦が二隻護衛についている。また空には朝から夕方まで飛行機が一機護衛に当たってく

れていた。十日ほどして何事もなく高雄港に入港する。食糧などの積み込みであろう。我々は上陸は許されない。一步でよいから土を踏んでみたい、港は入り口の狭い良港であった。

一泊して高雄港を出港しバナナが一人数本ずつ支給された。さすがバナナは本場である。

夜中に汽笛が鳴り、皆が飛び起きた。ドドンと爆音がして船が大きく振動する。魚雷をくらったと思ったが、この船から投下した爆雷の爆発の振動だそうである。

遠くの方に大きな火柱が上がって数分で消えた。我々の船団が魚雷を受けて消え行く光であった。ここはバシー海峡である。かくて無事マニラ港に着く。この港もその夜出港する。数時間進んだころまた爆雷音におどろかさされる。今度も遠くで火柱が上がり数分で消える。また僚船がやられて消えて行った。船は入り江に入って何日か過ごして出港した。

その後は敵潜の出没はなかったが、風波が強くなり大波に船は木の葉のように揺れ動いた。航行途中日本

海軍の艦隊に出会った。洋上のことでもあり心強さが一しお強く、皆が手を振って見送った。その後数日を経て門司港出港以降三十日以上長い航海の終わりを告げ、シンガポール港に無事入港したのであった。

苦戦中の原隊救援の急追ビルマ戦線へ

シンガポールでは兵站で二日ほど休んだ後、有蓋貨車でマレー半島縦断に移る。貨車の前後部に背囊を高く積み上げ、その柵に銃を立てかけ、足を伸ばす余裕がないのであぐらをかいた姿勢である。何日か北上してタイ国に入り、これからが軍が全力投入して建設したタイ国からビルマに通じる泰緬鉄道である。川にかかった橋は丸太を組んで積み上げたもので列車は徐行してやっと通過した。その上制空権が敵側にあるので、途中待避のため進行に制限が加わる。防疫上支給された飲料水以外は固く禁ぜられていた。禁をおかして谷川の水を汲んで、ひどく叱られた兵もいた。列車は燃料として薪を燃やして進行していた。かなりの日数を要してサルウィン川に到着、下車、渡河後再び列車輸送、古都マンダレーへ向かう。

途中の駅で住民の売る餅とか黒砂糖を物々交換により買い求めたりした。制空権がないので列車や駅等で銃弾の痕跡をあちこちに見ることが出来る。列車は数日を要してマンダレー駅に到着下車した。

原隊救援ビルマを北進行軍

かなり歩いてマンダレー王城の前を過ぎる。赤レンガの高い壁で囲まれた縦も横も約二キロの王城であった。我らはこの王城の後方にある大きな寺院に宿泊。バゴダの頂上から四方に向かってロープが張っており、このロープが陽光を受けてキラキラ光を放つ。この寺院でコンクリートの上に毛布を敷いて寝た。三泊して出発した。九月も末となっていた。

ここからいよいよビルマルートを上行軍に移る。一日八時間の行軍を二日続け、次の一日は休んだ。避暑地で別荘の多いメイミョウであった。ここで飛行機が来たが敵機でなく友軍機であった。これが最後に見た日本軍機であった。

ビルマはバゴダの多い国であり大きい積尊の寝像が見られた。またお坊さんが多く小僧さんも多い。黄色

の僧衣をまとった坊さんが十数人並んで街を歩く姿をよく見かけた。

行軍中雨の口もかなり多かった。濡れた服を乾かす時間はない。また水は前述のとおり厳禁であり、水筒の水のみで、雨の日の行軍は口を上に向け大きく開いて雨水で渴きをしのいで歩いた。足にマメも出来るし食物も不足して来て、疲れも一日一日と加わって来る。

ラシオで夜に入ってから広場に集結し、菊兵团と龍兵团に行く者とに分けられ、私は龍兵团に赴くこととなった。夜襲用に地下足袋が支給されたが用いる機会はなかった。

前線がだんだんと近づいて来る。夜行軍が続く。道路は上り。山また山と続く。舗装されたビルマルトが見上げる高い山の側面を通っている。海拔三〇〇〇メートルもあるとか。制空権がないので、脇道も利用する。脇道は赤土で雨の日はひどいぬかるみとなり行軍を妨げる。

隊には何頭かの牛馬がいた。運送用の牛馬車を引く

ためである。牛馬も疲れている。車輪が一・五メートルもある。悪路用に大きく出来ている。私達の馬は歩けなくなるととうとう死んでしまった。牛はぬかるみにしゃがみ込んでしまった、引いても叩いても動かない。馭者は休む暇なく牛馬の世話に没頭せねばならない辛い役柄であった。

雲濃く低き 北ビルマ 何時まで続く山の嶺

果てはチベット、ヒマラヤなるや

起伏重々夜はふけて 飛ぶ黒雲よ月早し

真白き塔よバゴダの塔 昔の栄華きかせかし

今戦線の夜雨にぬれて 地にぬかずきて影淡く

祈る僧あり月の丘

ある町で休憩していた時、昼間敵機が数機来襲、爆弾投下と機銃掃射を受けた。爆弾はうなりを発して落下、銃弾の砂煙は身近に飛散する。何人かが負傷した。私の横に年老いた小隊長が軍刀を握って身を伏し

ておられた姿を思い出す。この地方は南国といえ高地であるので夜は冷える。内地で冬服が支給されたことが分かる。国境を通過して雲南省に入り芒市について。十一月中旬であった。

#### 師団の兵器勤務隊へ分遣

芒市には龍兵団の司令部があった。第一線はかなり前方の龍陵地区であり、大砲の発射音などが聞こえてくる。天候の良い日は、敵機がわが物顔で急降下して友軍陣地を攻撃しているのが見える。制空権のない哀れさである。

私はここで前線に出ることなく師団の兵器勤務隊に分遣となる。これが私の無事復員につながった運命の分岐点であった。

兵器勤務隊の隊長は大尉。隊は二分され、私は第一線哨壺壕の上に被せる鉄板を円錐形に加工し銃眼をあけたものの製作であった。他の一隊は補給が不足している手榴弾の製造で、鉛を筒状にして外側はブリキ板にて手榴弾の製作をしていた。旋盤とかボール盤とかを取り付けた車両があり、かなりの兵器の修理が出来

た。またこの勤務隊内に多くの同郷人や三池炭鉱当時の人もおり、心強く勤務を続けることが出来た。工場は野生の大きなゴムの木の下で幹の直径二メートルもあり、枝は直径五〇メートルも広がっており、敵機来襲時はこの幹を盾にグルグル回って身を守った。

この地区は砂糖きび畑が多く、住民から軍票で買って大きさ三〜四センチもあるきびを食べた。大きな牛をハンマーで打ち殺して鉄板で焼いてたらふく食った。果物では日本の梨に似た野生の果物があつた。

トラックはガソリン不足のため木炭車に改造してあつたため木炭焼作業も続けられた。木炭焼の経験者の指導で釜が築かれ煙の色で窯の火の調整、炭の取り出し等続けられた。内地に送金出来るとして二十円ほど送ったが、復員してから確かめたが家には届いてなかった。

この地は中国であるので日本とは家の構造が異なり、屋根は瓦屋根、土壁造りであり、壁に牛糞が乾かしてあり、燃料に使われていた。何十日も経った。戦

況は悪くなり、隊は後方ワンチン方面へ移る。マラリアの予防薬キニーネは服用していたが、蚊には刺され続け食事の不十分も原因して遂にマラリア発熱に至った。

製作した手榴弾のテストを兼ね川へ魚獲りに行った。この地方の住民は魚を食わないので魚が川に多くいた。先行した曹長が投擲した手榴弾の爆発が少し早かったため負傷したという騒動も起きた。

北ビルマはサンリ、トカゲ、ハゲタカ等が多かった。サンリは長さ一〇センチもあり、時々発見した。編上靴を脱いでいると中に侵入していることもあった。尾に七節あるものが特に毒性が強かった。トカゲは四〇〜五〇センチもある大きなもので、農家に泊まった時等よく見かけ、気味の悪い物であった。ハゲタカは牛の死体等に群がっているのを見かけた。翼を広げると二メートルもあり、死体の肉に集まるので生きたものには集まらなかった。煙草は住民が耕作していた生葉を乾燥させ、小さく刻んで経本の紙等で巻いてのんだ。

後方へ後方へと移動が続く。あるジャングルの中にいた時である。雨はかなり激しく降っていた。下腹にしほりを感じるようになり、だんだん強くなってきた。大便が今にも出そうなので用便に行く。ほんのわずか卵の白身のようなものが出るばかり。十分もすればまた催して来る。便所に行っても前と同じ。私は車に乗せてもらって移動することとなった。大便を催すのが下車出来ず、出るに任せのたれ流しの状態になり果てた。

とうとう衛生曹長より入室患者として扱われた。特別に手当てをするわけではない、体を使う使役から免除されるだけである。このころの野戦病院は薬も少なく、衛生兵も少なく、負傷者の傷口は手当ても届かないのでウジ虫がわき自分で水を使ってウジ虫を洗い流している状態である。ために、曹長が私を野戦病院へ送らなかったのであった。

#### 戦闘線部隊へ復帰

入室患者は三人、衛生上等兵一人計四人。戦況はますます悪化し、我が隊も前線につくよう命令が下っ



た。私は小銃も無いので徒手で前線に出ることになる。帯剣と手榴弾一発が私の装備である。間もなく道は上り坂となる。ひぎに手を当て助勢して先へ進むが、前の三人とはだんだん離れてくる。三人が休憩している間に私はやっと追いつくことが出来たが、私が到着するのを待って彼らは出発する。時々住民に会うことがあるが住民は決して好意的ではないようだ。苦しく寂しく手榴弾自殺も考えてみたが、また思い直して歩き続け夕方やっと本隊に合流することが出来た。

ところが衛生曹長から「松尾はまだ戦闘につける身体ではない。明日ちようど車がいる所まで下山する者が二人いるからその者と下山せよ」と命ぜられ下山した。ワンチン付近までは乾燥野菜もあつたが今はない。バナナの茎の芯をジャングル野菜と称してよく食べた。鶏もいたが一〇メートルも飛ぶので獲るのが難しかった。

シャホウ峠に差しかかった。この峠道の片側の山は敵に占拠されていて、道路を通過する車両は砲撃に曝され、撃破される危険個所であった。私達は車三台に

分乗し、夜を待って出発を待機する。時折機銃の曳光弾が飛び不気味である。ようやく出発、車はライトを消してスピードを上げて走る。敵の機銃が火を吹いた。通路はかなりの弾痕の穴があるので車は上下左右に大揺れに揺れ動く。幸いにも穴にはまることなく、機銃弾を受けずに突破することが出来た。

私も戦闘に参加することとなり隊に加わった。小隊長は長崎県出身の曹長である。班長は伍長であり擲弾筒手であったので、私は班長と一組となり私が擲弾筒と擲弾五発を持った。この擲弾は重いので、あとの擲弾は他の兵に分けて持ってもらう。班長は小銃を持つ。この弾は瞬発信管がついていて木の葉等に触れても爆発するのでジャングル内等では射撃出来ない。

第一線の歩哨は初めてであり、夜間の歩哨は針一本の音でも気付くほど神経をとがらせる。時計が無いので腕を伸ばし指四本の幅、月か星が動いたら約一時間であると教わった。その一時間の長いこと。サルウィン川の支流と思うが、二つの川の合流地点の一角に陣取った所で私は夜間歩哨に立った。真の暗夜であっ

た。班の者は一〇メートルぐらい離れた場所に休んでいた。

三十分経った頃、下の方からガサガサと音が近づいて来る。五メートルぐらい近づいた時「誰か」と言ったところ、ダダダと後方に逃げ去った。歩哨交代してから上等兵に報告したら「人が来たら敵以外居ないから、黙って刺して良い」と教えられた。翌日昼間歩哨に立っている時、猿の群れが水辺に遊んでいるのを発見した。昨夜の物音は猿の接近した音であったと気付いた。

ある日、前方にあった小隊正面に敵が現れ交戦が始まった。小隊長が不意に食事せよと命じる。戦闘の終わった後の食事は飯が喉に通らないからであると教えられた。体験から出た言葉と感心した。

中隊が交代で布陣し、その援護下に他の隊が後退をする。相互に繰り返し反復して後退した頃であった。突然、敵と銃撃を交えた。雑木林の中なので敵兵の姿も見えず弾の飛ぶ方向もわからない。幸い林の空間があったので、敵の機銃の発射音を目標に班長が擲弾筒

を構え、私が擲弾の安全栓を外し筒内に入れ発射、数秒後大きな爆音。三発連射後、敵機銃はピタリとやんだ。擲弾が命中したものと皆で喜んだ。

夜行軍で移動し、次の陣地へ着く頃は既に夜も明けの頃となった。着いたら壕を掘ったり食糧を集めたり、だんだん寝不足が蓄積し、前の者が右に曲がったのに気付かず直進したり、前の者が止まったのに眠っていてぶつかったり、半分眠って歩いている状態である。

敵機の中で偵察機が出現して来た。上空をゆっくり地上を偵察しつつ飛行し、発見するとロッキードとか軽爆撃機に通報し、すぐ敵機が飛来してきて攻撃を加えるという方法である。制空権のない哀れさをしみじみビルマ戦線では味わった。

## 終 戦

今日は重大な連絡があると告げられ、各隊は集結したが「直ちに戦闘を中止せよ」との事であり、敗戦を予期せぬ我々は戦いは勝利に終わったものと判断して喜んだ。日が過ぎると敗戦、無条件降伏の実態が明白

に浮かんで来た。

連合軍側から正規な道路は通行禁止の命が下り、通常「象の道」と呼ばれる脇道を徒歩で歩けという通達であった。時折象が荷物や人を乗せて通るのに出会う。

タイ国に向かうにはビルマの大河サルウィン川を渡らなければならなかった。川幅は一〇〇メートル以上あったと思う。濁水が滔々と音をなして流れ、その源は西藏に発し、中国、ビルマへ流れる大河であった。対岸に太いワイヤロープが張られ、平舟を利用して渡河するのであった。

渡河が終わった地点で原隊復帰の指令が出た。私達数人で原隊復帰の行軍が始まった。私は小銃と弾丸二〇発をもらって出発した。住民達は小銃や拳銃を欲しがって高値で取引が行われるとのことであった。私は木綿針一本をバナナ一房と交換した。行軍中他の隊の者で落伍している者が何人もいた。どうしてやる事も出来ない、自分もやっと歩き続けているのである。上り坂は体力を消耗し時間を要した。反面下り坂は足が

ヒョロついて困った。また編上靴が滑り破れ、そこから土砂や小石が入って痛くて歩行を苦しめる。一週間ぐらい歩いて連隊本部に到着した。この行程が白骨街道と称せられた。

本部に「兵器勤務隊から分遣者復帰しました」と申告したところ「お前達の籍はない」との言葉にはショックを受けた。私は原隊に到着する直前、芒市で兵器勤務隊に分遣されているので昇進も一等兵にはなっているがその後の昇進も籍もありません。連隊本部伝令班に籍を置くこととなった。

連隊本部と共に泰緬国境を越えてタイ国チェンマイを通った。この時大きな橋を渡ったところで五十歳ぐらいのご婦人が小さい子供と二人で我々部隊を見送ってくださった。日本の方であろうと語り合った。この近くで連合軍の武装解除を受けた。

我々はナコンナヨークの抑留地に移された。龍師団以外の部隊も収容されていた。労役は道路工事等であったが、我々連隊本部の者は使役はなかった。この

近くに日本軍従軍看護婦の宿舎があった。彼女らも行軍で移動したとのこと、大変苦労したと思う。

この收容所は監視、食事等恵まれていたと思う。

昭和二十一年五月バンコックに到着。乗船した船は海防艦を改造した船で大竹港に入港、瀬高駅から歩いて家路についた。

妻は復員局まで出向いて安否を尋ねたらしいが「ビルマの戦闘は全滅状態なので返事のしようもない」との回答であった。戦死したものと思つて覚悟はしていたと喜んでくれた。

現在は町の社会福祉協議会会長として働いて、入院加療中の妻を見舞つて元気で暮らしている。

## 獣医として

### ビルマ諸作戦に参戦

福岡県 河野 要

私は大正五（一九一六）年五月、福岡県に生まれま

した。

軍歴を申し上げますと、昭和十六（一九四一）年に久留米西部第五十四部隊に入隊、十一月には陸軍予備役獣医師見習士官を拝命しましたが、同日、南支派遣軍第十八師団山砲兵第十八連隊に転属となりまして南支黄埔上陸、同地に駐留、警備に当たりました。

昭和十七年二月にシンガポール攻略戦に参加し、四月にはビルマ・ラングーン上陸しました。十月に少尉に任官しまして、昭和十八年一月にはビルマ最北端のモーニンに移駐し、同地の警備および討伐作戦さらにサンブラバン作戦に参加しました。同年九月には雲南、古勇・古衛作戦、十月にはフーコン作戦に参加しました。

昭和十九年八月、転進命令により交戦しつつ南下し、その間中尉に進級しましたが、昭和二十年六月より最後の陣地シッターで攻撃中、終戦の詔勅が下りました。

大東亜戦争という国の存亡を賭けた戦いに、私達は